

唱がまた、元のくぐもった音色に戻って終わりにいった時、これは音楽上の遠近法なのではないかと理解した。日本人として誇らしい一夜だった。(中東生)



ドイツでも有名な鈴木バイエルン放送響デビューは注目を集めた ©Peter Meisel (BRSO)

### Concert 鈴木雅明がバイエルン放送響にデビュー

鈴木雅明の名はドイツでも認知度が高く、バイエルン放送交響楽団との初共演、それもシーズン開幕公演ということで、前から注目されていた。公演2日目の9月28日は多少空席が目立ったが、聴衆は「オラトリオ《パウロ》」に聴き入っていた。

当楽団で聴き慣れた音とは異なる、くぐもった音色で「序曲」が始まると、その厳かな響きは作曲者のメンデルスゾーンを飛び越え、J.S.バッハの時代の教会にいるような錯覚を起こさせた。音が膨らむと効果的ではあるが、何故ヴェールをかけるのか、理解できずにいた。ソリストたちはリアルで、ソプラノのキャロリン・サンブソンは親しく語りかけるように聴衆との距離を縮め、宗教曲のヴェテラン・テノール、マーク・パドモアが歌い始めると、全体が締まる。バスは病欠のフランツ・ヨーゼフ・ゼーリヒに代わってアルベルト・ドーメンが華のある瑞々しい声を聴かせた。同響合唱団は、この世のものと思えないような弱音を長いフレーズで聴かせ、テンポの変わり目もしっかり鈴木の手についていった。

休憩後も鈴木はハイ・テンションを保ち、テノールとバスの美しいデュエット、バスのアリアも立派に聴かせたが、頂点は美しいチェロの前奏に、鈴木とパドモアがピッタリ寄り添った第40番の「アリア」だった。信者でなくとも死を前にしたら聴きたいと思わせられた。そして合